

「少林拳」誕生に関する史的考察

——中国武術史研究の一環として——

馮 宏 鵬*

(2004 年 5 月 31 日受付, 2004 年 8 月 18 日受理)

A Historical Study on the Shalin Quan: As Part of the Chinese Wushu Study

Hong Peng FENG

In the long history of China, the birthplace of one of the four ancient civilizations, many traditional cultures were evolved. Wushu in particular, is viewed as a special part of these cultures, and is even regarded to as a “shining pearl”. Among the various schools of Wushu, Shaolin Quan is regarded as the symbol of Waijia, namely the “external school”, and was born in the historical holy ground of Chan sect—the Shaolin Temple. The name of Shaolin Temple is widely known, and is a pronoun for the Chinese Wushu. A number of Chinese Wushu schools, including Tai Chi, came under the influence of the Shaolin Quan, evidenced by their histories. Shaolin Quan was practiced not only as a means to protect the Temple’s property, but also as an exercise to maintain fitness and health.

Shaolin Quan, also has had a very close relationship with Buddhism and the Chinese Chan sect during the course of harmonization of Buddhism from India with the Chinese culture. On the basis of proselytization of Buddhism founded by Ba-Tuo, the founder of the temple in the 5th century, Chan sect was brought in by Bohdi-dharma, who arrived from India in 527, triggering the wide dissemination of the sect. As part of the Chan ascetic training taught by Bohdi-dharma, a particular type of physical exercise modified from the Indian Yoga was practiced. On the basis of that exercise, Shaolin Quan was formed. The Shaolin monks were sent to the battlefields and distinguished themselves in war. As the years rolled by, the name of “Shaolin Quan” gradually established its status as a generic term for the Chinese Wushu.

Key words: Shaolin Quan, Wushu, History

キーワード: 少林拳, 武術, 歴史

I. 研究の意図と着眼点

中国武術の諸流派のうち、外家拳と呼ばれるものの代表である少林拳は、禅宗の聖地である少林寺¹⁾で誕生し、悠久の歴史を刻んできた。「天下の第一名刹」²⁾「天下の武功は少林から出る」³⁾などと称されているように、少林寺という名は広く知れ渡り、この寺院名に由来する少林拳は中国武術の代名詞とも

なっている。中国武術の多くの流派の歴史を遡ると、それらの大部分は少林拳からの影響を受け、進展、変化したものであることがわかる。健康を目的とする武術(=内家拳)の代表としての太極拳も例外ではない。少林拳の歴史を調べると、少林寺で修行が行われるようになった頃の初期の少林拳は、寺院の財産を守るための武術だけでなく、身体健康

* 大学院体育科学研究科博士後期課程 スポーツ文化・社会科学系(体育史研究室)

も目的としていたと考えられてきたからである⁴⁾。

中国武術の中で最大流派であった少林拳は、中国仏教(禪宗)との深い関係を持っている。中国に伝来した異国の宗教である仏教は中国で円滑に教線を延ばしていくために、中国固有の風俗・習慣・思想・信仰などと融合していった。これはインド仏教の在来思想との習合を意味するものである。そこで、本研究では少林拳が仏教の中国化を担ったであろう少林寺という仏教寺院で誕生したことに着目し、少林寺の創建なくしてこの武術の発展はなかったことに留意するものである。

少林寺は495年に北魏の皇室によって創建された。そのため、この寺院は皇室から多くの恩恵を受ける代わりに皇室の護衛のための役割を担うことにもなり、次第に政治的・軍事的な色彩を強めていったといわれている。その嵩山少林寺を開基した跋陀(5世紀末頃)は小乗仏教の布教活動を行ったが、527年にインドから菩提達磨大師(?~537)が少林寺にやってきてからはこの寺院は大乗仏教としての禪を伝えるための拠点となった。中国における大乗禪はこれを契機として普及が促進されたのである。

その普及の過程において少林寺の僧たる菩提達磨大師が禪修行の一環として、インドのヨーガを中国化させた健康体操を行い、これがやがて柔拳としての太極拳へと発展したと伝えられているが、その真意は定かではない。これに対して寺院の防衛のために少林寺の僧たちが戦場に赴き武功をあげることで、いつしか少林寺の武術の呼称たる「少林拳」は、中国の武術を総称する地位を得るに至ったということができよう。

このような観点から先行論文に目を向けると、これまで中国武術に関して総括的、あるいは部分的に研究を行った著書や論文は多数あり、中でも、少林拳の起源と発展に絞って総括的な研究を行った著書や論文も少なくない。そこでここではまず、それらの先行研究論文を大きく①「少林拳の起源と中国武術の発展を通史的に検討した文献」と②「少林拳に関する特定の問題を史的に考察した文献」とに分けておくことにしたい。①に関しては習雲太⁵⁾、体育史教材編写組⁶⁾、李季芳ほか⁷⁾、松田隆智⁸⁾、笠尾恭二⁹⁾によって、②に関しては蔡龍雲¹⁰⁾、汴京論苑¹¹⁾、少室山人¹²⁾、夏維明¹³⁾、周偉良¹⁴⁾、松田隆智¹⁵⁾によって著されている。この①と②の研究を合わせ

て眺めてみると、中国側と日本側とで研究の内容が異なることがわかる。したがってこの観点から先行論文に関して特徴的なものを取り出し、若干の検討を試みることにしたい。

中国での一般的な見解は次のようである。すなわち高等学校教材として編まれた『体育史』(体育史教材編写組編)¹⁶⁾では、古代の武芸、養生、武術が取り上げられ、少林拳の発展と他の武術諸流派への影響なども指摘されていることがわかる。しかし、少林拳の起源とその背景については、詳しく述べられていない。これに対して李季芳ほか編の『中国古代体育史簡編』¹⁷⁾では、特に養生術と軍事武術が論述されている点は注目される。しかし、武術の代表拳種である少林拳の誕生と発展過程についての説明が不十分であるといわねばならない。

一方、日本における研究をみても松田隆智は『図説中国武術史』¹⁸⁾を著し、その中で少林拳に関するまとめた記述を試みているが、少林寺の建立、少林拳の起源説及び流派としての発達史に関する詳細な記述はみられない。これを補ったのが笠尾恭二の『中国武術史大観』¹⁹⁾である。本書は5つの章により構成され、「中国武術の起源と確立」、「少林寺武術の源流と展開」、「倭寇動乱の兵法再興と日中武術交流」、「太極拳武術の生成と発展」、「中国武術の展開」を取り上げているので、中国武術史の全容の中で少林拳がどのような地位を占めてきたのかについて知ることができる。また、本書は従来の少林拳の菩提達磨大師開祖説が誤りであることを詳細にわたって立証したもので、その成果は高く評価されねばならない。しかし、少林拳の起源を武僧の自衛手段に求めるものではなかった。

そこで本研究では中国と日本両国の武術に関する史料を検討する中日比較武術史の研究を射程におきながら、まずは中国武術史研究の一環として、中国武術を総称するまでに至った「少林拳」の誕生について「少林寺」の防衛の観点から明らかにするものである。

II. 「少林拳」誕生の史的背景

1. 中国における仏教の伝来と普及

中国に仏教が伝来するのは前2世紀末であり、中央アジア横断の東西交通路(シルクロード)が拓かれたことがその契機であった。しかし、仏教は西北

インドから中央アジアを経て陸路から伝播したばかりでなく、スマトラ島・マレー半島を迂回し南海路を経てヴェトナムを経由して、中国南部に至る海路からも伝えられている²⁰⁾。このようにして伝来したインド仏教は中国語すなわち漢語に翻訳され、漢字文化をとおして普及していくことになった。

かくして大乘仏教は中国において「天台宗や華嚴宗の教理を形成し、禅や浄土の実践仏教を生んだ」²¹⁾ことで知られているが、「中国仏教者は最初から大乘仏教をもって出発し、専ら大乘仏教の真意義を追究し、ついに大小乗を打って一丸とした一乗仏教の教理を開拓し、さらにそれを実践化して中国独自の仏教たる禅宗や浄土教を生み出すに至った」とみなすのが正しいといわれている²²⁾。

ともあれ、中国における仏教の伝来は諸説あるが、信頼のおける仏教初伝としては漢の明帝の異母弟であった楚王英が中国で最初に確実に仏教を信仰したという史実があげられる。この楚王英は建部17年(41)に楚の王となり、28年に楚国に赴任しているが、弟が起こした事件の過ちを悔いて仏教儀式を行い反省していること知った兄の明帝はこれを許したという。このことから、後漢の朝廷が国家の上層支配階級に儒教や黄老の教え²³⁾とともに外来仏教を信仰することを公認していた事実を知ることができよう。しかし、「中国に仏教が受容された最も初期の信仰内容が福を求める現世利益であったことは、後の中国仏教史を一貫する態度であり、中国仏教の最も基本的な性格を示すものである」といわねばならない²⁴⁾。

一方、後漢の皇帝で初めて仏教を信奉したのは桓帝である。それは彼が延熹9年(166)に黄老を濯龍宮に祠っていることから明らかである。しかし、彼が惹かれたのは「仏教の倫理的側面ではなく、どこまでも仏教を不老長寿を祈願する黄老の信仰と同類して、その熱烈なる神仙的欲望に駆られて黄老を祭祀するとともに浮屠²⁵⁾をも併せ祈ったのである」という²⁶⁾。それは、「異国の宗教である仏教を中国に伝道布教するための唯一の手段は、中国固有の風俗・習慣・思想・信仰などにできる限り結合調和させること」であり、「道士や方術家が説く不老長寿術に併せて仏教の教えを説く必要がある」からである²⁷⁾。寺院を建立して仏像を安置するようになったのは後漢の末期であった。このころになって皇室の

力が衰えたこともあって、人心は不安動揺し、思想も混乱し、また儒教の地位の墜落と相まって、人々は厭世観にとらえられ、老荘の虚無思想が隆盛をきたした。そのため「仏教も諸經典の伝訳と相まって老荘と類似する教義が注目されるに至ったのであるが、この時代の仏教史上に足跡を残したのが笮融という人物であった。彼は仏寺を建立し、仏像を作り、浴仏会を行い、社会事業として施飯を供給した」という²⁸⁾。これは後漢の靈帝末年から献帝の時代、すなわち190年前後の徐州の仏教の状態を示しているという²⁹⁾。

2. 大乘仏教にみる仏教の中国化と禅宗の成立

前2世紀末に中国に伝来した仏教は大乘仏教を優位に置きながら、中国の古来の宗教たる儒教や道教と融合しつつ、インド仏教の中国化を図っていったと言われている。大乘仏教として中国化した禅宗も同様である。そこで、次に仏教が儒教や道教とどのような過程をへて融合し、中国独自の仏教文化を築いていったのか、また大乘仏教としての禅宗がどのようにして中国で根づいていったのかについて概観していく。

南北朝時代、とくに南朝において仏教界と儒教界ではそれぞれ「因果応報」の問題と「神滅不滅」の問題が主張され、これを巡って論争が展開された。「儒教は形神ともに滅し後世に応報なしと主張するのに対して、仏教は神不滅を唱え、三世因果応報を主張した」³⁰⁾のである。しかし、この抗争は南方において闘わされたのであって、北方では「五常と五戒との一致調和」³¹⁾が説かれており、この思想は北朝においても一般に受け入れられていた。

一方、仏教は道教の側から抗争が挑まれている。北魏の太武帝の時代、寇謙之は儀礼面において仏教を取り入れながら、新天師道を開創した。一方江南においては宋代に陸修静が、梁代には陶弘景が出て、教学の整備と道教經典の整理・体系化が行われた。陶弘景は茅山派道教を開創した。このような道教が教团的にも教学的にも整備されその勢力が増大するや、必然的に当時、大きな勢力となっていた仏教と対立抗争するに至ったのである³²⁾。

インド仏教が中国に受容される過程で儒教や道教との抗争を経験しなければならなかったが、結果として仏教は中国土着の宗教たる儒教や道教を受け入れ、儒教や道教は外来の仏教を容認するようになった

ていく³³⁾。

中国における禅法は後漢の安世高に始まるといわれている。しかし、南北朝時代を迎えるまでは禅法は多くの人びとの知るところとはなっていなかった。南北朝時代になると中国の仏教は教義を母国語で学ぶことができるようになった。この時代になって仏典が漢訳され、本格的に研究されるようになり、その結果として仏教の諸派の誕生・興隆を促すことになったのである。その仏教諸派とは涅槃学派、成実学派、地論学派、摂論学派、禅・浄土学派などである。そこで、ここでは本研究において取り上げようとする少林寺が禅宗の寺院として創建されていることから、少林寺の中で生まれたとされる少林拳の誕生の背景として中国における禅宗の成立について明らかにしておくことにしたい。

禅とは瞑想の修行方法としてインドの紀元前に行われていたものであるが、「仏教が覚者の教えとして起こるに及び、心の本性を自覚することを説くにあたって、究極的には修と証、すなわち修行と覚証とは一体的なものでなくてはならないとし、瞑想することをもって単に無我無心の状態にとどまるものではないとした」³⁴⁾との考えに基づくものである。この禅はインドから中国に伝わり、小乗禅よりも大乘禅の方が広まっていったが、その推移は相次いでなされた禅に関する經典の漢訳が影響したと言われ、漢訳によって、禅への理解が啓発され、その認識が深められたことに基づくものであったという。

3. 高山少林寺の創建と中国禅宗の普及

1) 高山少林寺の創建

高山少林寺の開基は5世紀末に活躍した仏陀禅師である。彼は跋陀・覚者とも呼ばれたインドの僧である。西域を経由して華北に入り、北魏の孝文帝に重用され、北魏が都を平城から洛陽に遷都したときに、洛陽に移っている。そして北魏太和19年(495)に高山(河南省)の少室山に堂宇を建立し、ここに住した³⁵⁾。

また、跋陀は「經典に精通しており、中岳に長く住み、孝文帝の信頼と尊敬を得て、少室の林の中に寺を建ててもらい、さらに寺の中で經典の翻訳をすることや門徒生を取ることを許された」といわれている³⁶⁾。このことから推すことができるように、「少林」という寺号は、後に、この寺が少室山の麓の林にあることからつけられたものであることがわか

る。このお堂にて小乗の禅觀を修していた彼の下に多くの門弟が殺到したという。このことは、「四方よりうわさを聞きつけた者たちがあらゆる方法を考えて寺にやってきた。そのため、大量の民間の武を習う人たちも寺の中の雑役夫となった。まだ貧困層で技能を持っていた少年たちは寺に出家し小僧となった」³⁷⁾とか、「跋陀が少林寺で広めていたのは小乗仏教であった。小乗仏教は自我の解脱を目的とした早期のインド仏教であり、当時、少林寺にきた修行者の数は数百人にも及んだ」³⁸⁾とかいわれていることから知ることができよう。

2) 「菩提達磨」伝説と中国禅宗の普及

『仏教大事典』(小学館)によれば、菩提達磨(Bhṛhidharma ボーディダルマ)像は次のように描かれている³⁹⁾：「中国禅宗の初祖で、経歴・事跡とも不明な点が多く、さまざまな伝説がある。6世紀初頭にインドから南中国に至り、後に北地に赴いて禅を広め、北魏孝明帝の熙平年間(516～524)に洛陽にいて、洛陽東方の嵩山少林寺で壁觀(壁に向かって坐禅内觀すること)を実践、面壁9年の坐禅修行をしたことによって壁觀婆羅門と呼ばれるようになったという。彼の伝えた禅は、これまでの小乗禅觀と系統の異なる大乘禅で、壁觀を基本とする実践にその特徴がある。」なお、菩提達磨は少なくとも東魏孝静帝の天平年間(534～537)以前に洛陽で没していたという。

このように仏教事典では一般的な達磨像が示されているが、不明な点があることも指摘されている。伝説上の人物ではないにしても、「達磨の姓は刹利と言い、南天竺の人、釈迦の第二十八代目の孫である。最初は南海、その後は江北、最期に嵩山少林寺を訪ねた。寺の北の山の中腹のある洞窟にて面壁を九年間行った。その後、二祖になる慧可を弟子にした。達磨が最初に伝えた仏教は禅宗である。ゆえに達磨は中国禅宗の初祖として崇められ、そして少林寺は中国仏教禅宗の祖庭として呼ばれている」⁴⁰⁾と理解されているのだから、達磨という人物像は曖昧模糊としているところがあるといえよう。ともあれ、面壁という重要な功績を残した達磨は、中国の禅宗の初祖として崇められているのである。

4. 少林寺創建以前の中国武術の展開

少林寺創建以前の中国における伝統武術は古来より戦闘術として発展してきたものであるが、周・

秦・漢の時代以降からは単なる戦闘のための術は芸道としての武術、すなわち武芸へと発展している。周朝は祭祀軍事共同体であるといわれているが、この時代の『礼記』の文王世子編には「春と夏は武を学び、秋と冬は文を学ぶ」⁴¹⁾と記され、また周朝の役人は戦時には武器を手取る備えが必要であるために、役人の資格として楽器を奏したり、算術に優れているだけでなく、弓を射、馬に乗る能力を持つことが求められたといわれているためである。周の時代、射礼としての弓術は大射・賓射・燕射・聘射・郷射・州射・武射・軍射などとして展開されたのは一つには役人の軍人としての素養を普段から磨くことが必要であると考えられていたために行われたのである。また、刀術もかつては重要な戦闘手段であったが、これが漢代には芸道としての展開をみるようになり、剣舞として行われたと伝えられている。なお、漢代に入り、三権が分立して職業的軍人が現れるようになった。このことを前提に考えると、「職業軍人の採用の基準は後代の武学的なもの、すなわち、刀術、槍術、馬術、力技に重点がおかれたであろうから、軍人を希望する者は、拳法、相撲を熱心に練習していたと考えられる」⁴²⁾とみることも可能であろう。

ところで、『中国少林文化学』の著者は階級社会の出現を基準として武術の誕生を次のように語っている」⁴³⁾。

「我が国が階級社会に入り、生産力の発展と共に兵器の技術も進歩し、武術の発展は新たな段階に入った。矛、戈、戟、鉞、刀や剣など多種類の兵器が現れた。春秋戦国時代になり、諸侯の紛争が相次ぎ、七強が力を競い合い、戦争も頻繁に起こった。武術はそのような状況の中、軍隊のなかで迅速な発展を遂げた。同じように人民の間では、侵略や掠奪に対抗するために様々に武術を練習するようになった。例えば齊の国は非常に拳術を重視していた。『荀子』の書にもそのように記載され、規定によると、民間の中に拳の達人がいるにもかかわらずその人を匿って名乗り出ない者は罪に問うとあった。また、莊子は『説劍篇』の中で、趙文王は闘剣を見るのが好きで、剣客を三千名余り養って、昼夜宮廷の中で競い合わせていた。漢と魏の時代になると、武芸の試合が大変盛んになり、それ

によって格闘技も発展を遂げた。『漢書』の記載によると、『剣道』は38篇あり、『手搏』は6篇あった。人々は酒の酔いに興じて、『使拳』や『酔舞』などの武芸を披露した。」

このような階級社会の出現によって富みの収奪のための戦争が始まり、戦争戦術に適した武術がそれぞれの時代社会に受け入れられていく。このような解釈のもとで中国武術を分析することは可能であるが、少林拳の場合にはもう一つの側面から分析する必要がある。それは「寺院の防衛」という側面である。伽藍を守るだけでなく、宗派を守るための戦いもあることに注目しなければなるまい。

III. 中国武術としての「少林拳」の誕生

1. 仏教の庇護と弾圧

北魏時代の仏教は「庇護と弾圧（廃仏）」の双方を経験した。452年に「高宗文成帝が即位してから仏教は再び庇護される」ようになり、492年に「孝文帝が洛陽に遷都してから仏教はさらに庇護されていく」ようになったという⁴⁴⁾。このように北魏の孝文帝によって仏教が庇護され、仏教寺院の建立がなされるようになるが、その一つに次に取り上げようとする少林寺の創建があったといわねばならない⁴⁵⁾。

南北朝時代において仏教は大変盛んであったため、北齊、北周の時代には寺院は至る所に溢れ、僧侶の数もほぼ人口の半分を占めるようになった。そのためこの時代は働き手の半数が僧侶になってしまい、「食之者衆、生之者寡」といわれ、国民の生活に大きな影響が生じたのである。その結果、北周武帝の宇文邕は益州成都出身の衛元嵩を起用して改革を断行するに及んでいる⁴⁶⁾。彼が建徳三年(547)5月27日、仏教及び儒教の伝道の禁止令を下したことで、僧侶や尼僧たちの多くは故郷に帰ることを余儀なくされ、寺院や廟などの多くは廃業への道を強いられたのである。このような仏教及び仏教寺院に対する弾圧は少林寺にも及んでいる。

これに対して、北周の静帝は、封建統治の秩序を守ることを目的に、仏教と道教を復興させた。この復興政策によって、やがて各地に散らばっていった少林寺の僧侶たちも少林寺に戻るようになった。

このような仏教を巡る為政者の意図は隋政権においても継承され、その結果として仏教寺院としての少林寺も庇護されることになり、封建社会の統治階

級より大量の土地や財産を得て、寺院莊園を築き上げるに至った。このことは、隋の文帝楊堅は「周を倒した後、新王朝設立の証に、中国の五大山岳に寺院と舍利塔を建設するよう命を下し」、かつまた、「田畑をも寺院に賜与した」と言われていることから知る事ができよう。少林寺の伽藍はこれを機会に、復元され、「100頃（1頃＝約6ha）の広さを持つ大莊園」を寺領とすることができたのである⁴⁷⁾。

かくして北周武帝の廃仏によって大弾圧を受けた仏教教団は、隋代になって急速に復興し、わずか30余年間に過ぎない隋代において、中国仏教の最盛期をなした唐代の仏教の礎を築いていった。581年に北周皇帝静帝から禪定を受けて即位した楊堅（文帝）は、翌年3月に「勅して漢族が名山として神聖視していた五岳に仏寺各一所」を置き、さらには仏教の復興政策を着々と推進していった。その結果、隋代仏教は急速に栄え、「開皇より仁寿年間にわたって、度するところの僧尼230,000人、諸寺3,792所、写経46蔵132,816巻、經典の修理3,853部、石像等の造宮大小106,580軀、故像の修理1,508,940軀ばかりといわれる」までに繁栄したのである⁴⁸⁾。このように隋政権が仏教を庇護したのは理由があった。それは「仏教をもって統一国家の精神的支柱とする」⁴⁹⁾ためであった。

ところで、楊堅は長安に新都を建設して長年分裂していた南北を統合し、集権的な国家を築くために、管制の整備と科挙の導入、及び大運河の開削を試みたという。つづく煬帝の時代には「現在の北京付近から杭州湾に至る大運河の建設」が開始され、「長安から黄河を通じて江南に至ることができる」ようになった。しかし、「煬帝の時代の土木工事による負担と高句麗遠征の失敗により、各地で反乱が起き」、隋が滅ぶことになる⁵⁰⁾。その隋末に起きた農民の蜂起は隋の政権を支えていた地主階級に向けられ、さらに所領を持つ少林寺にもその矛先を向けてきた。これに抗するために少林寺の僧たちは武装して寺院の財産を守るために戦うこととなったのである⁵¹⁾。

唐の初期に少林寺の十三和尚は唐のために功を奏し、唐太宗より手厚く庇護され、爵位を与えられただけでなく、田畑40頃を贈られた。少林寺が所在する嵩岳は当時の都に近かったために、少林寺は唐

の皇帝たちが好んでよく訪れる場所となった。しかし、唐代の仏教は国家権力の下に従属せしめられた点を見逃すことはできない。唐代には「統一国家が建設され、国家意識が強くなり、中華意識が高揚される」ようになった結果、「王法の下に仏法が従属すべき原則が定められ、僧尼の犯罪に関する規定が国法の中に明記された」のである⁵²⁾。それでも唐朝は仏教を庇護している。それは唐初に新たに伝来した仏教を国政として奨励すべく、玄奘を重用した点にみることができる。彼は「文德皇后のために造宮された大慈恩寺に住し、翻経院において訳業に従事」していたからである⁵³⁾。こうして彼は鳩摩羅什の旧訳に対して新訳時代を開いていった。

ともあれ、唐の武徳の年間に、「僧侶たちが李世民を助けて王世充の反乱を征伐した功績を賞されて、少林寺は僧兵を持つことや、酒と肉食を許され」、僧侶の曇宗は「皇帝から爵位を受け、『大將軍』の号を下賜され」ている。そのため、「少林寺の名声は一時期大きく広がり、僧侶の数は二千人余りにも達した」という⁵⁴⁾。

2. 隋・唐代における武術の展開

この時代の武術・武芸の発展は府兵制と武科举制によってもたらされた。まず、府兵制についてであるが、「府兵」というのは、「府」という部門を基本単位として編成された部隊のことであるが、それを制度として定めたのが府兵制である。その内容は、府兵の徴兵単位を州及び県という行政単位とし、しかも兵士の普段の仕事の中心を田畑の開墾のための仕事に据え、農業に従事させるものであった。これが隋朝における府兵制の主要な特徴であるが、唐は隋の制度をそのまま引き継いでいる⁵⁵⁾。

唐の初めに編成された府兵の部門は「折衝府」と呼ばれ、634の部門があった。この部門を単位として戦争状態にないときは田畑を耕し、戦争が起きたときには出陣の命が下された。そして戦争が終結すると兵士は再び府に戻り、その総大將は朝廷に戻って役人としての仕事に従事することになっていた。したがって、府兵制の決まりとして「毎年の冬季、折衝府の都尉は部隊を率いて、訓練する」⁵⁶⁾ことが定められていたとみなすことができよう。だとすればそれがために、府兵に所属する兵士は身体能力を高め、馬術、弓術及びその他の兵器の操作の技術を磨かねばならなかったといえる⁵⁷⁾。

このような唐代の府兵制は100年ぐらい継続して実施されたが、唐の玄宗は開元3年(725)に府兵制を改め、募兵制をとっている。志願兵の募集にあたってその選抜の基準が設けられたが、それは宋人の張舜民の『画墁録』から知ることができるのであるが、その中で「物を持ち上げること」や「石を背負うこと」が審査され、その持ち上げや背負いは5回連続して行うことができなければ、不合格とされるものであった⁵⁸⁾。

一方、「武挙制」についてであるが、これは「武科挙制度」の簡略表記である。武挙制は隋の文帝開皇18年(589)に始まり、文官僚を選ぶために行われたものである。そのため役人になることを目指すものは「文」だけでなく「武」にも秀でていなければならなかった。これによって武術・武芸は発展することになる。しかし、早くも隋、唐時代には「文」と「武」を分ける傾向が現れて、「文武両道」は意味をなさなくなった。それでも「府兵制」と「武挙制」が同時に実施されたために、官吏たちは知的な側面だけでなく、身体つきも重視されるようになった。その結果、武芸は発展することになった。例えば、少林寺の僧はこの時代に寺院の財産を守るためと健康のためという二つの目的をもって武術の練習に打ち込むようになったのである。

裴旻は唐の玄宗の勇将である。彼の剣術は、李白の詩歌や張旭の草書によれば唐代一であると褒め称えられている。また裴旻は剣術が得意だけでなく、刀術も得意であった。この一方で唐代の大詩人李白も剣術に精通していることで知られ、国の両親のもとを離れてから30年の間、彼は普段から剣を身に付けて離すことがなかったといわれている。

ところで、唐代の剣術界において新しい世界が拓かれた。それは芸術的な剣の舞、砂分け剣舞のことである。杜甫は地方において、公孫大娘と彼女の弟子李十二娘たちが西域の健康舞踊を採り入れて、音曲に合わせて動く剣の舞をみたという。それは、剣器が踊るように演じられた剣術の舞であった。

角抵も中国武術の一つに数え入れられる。隋朝成立後も秦や漢の時代に行われていた角抵は庶民にとって愛好された『隋書・柳彧伝』(第1483)の中で「旧正月十五日に、角抵の戯を為す」と記されているのはそのことを証していよう。隋の煬帝在位(605~617)のとき、全国的な角抵の戯会が開催さ

れたが、この史実もまた隋の時代において角抵が依然として普及・発展していたことを示すものといえよう。

唐代において「角抵」はまた「角力」「相撲」とも呼ばれたが、司馬光による『資治通鑑』の中では「手搏」と称されている。これは唐代において角抵が発展したことを示すものであるが、それは次の4つの面から指摘することができる⁵⁹⁾。

- 1) 角抵は唐代において皇居宴会の踊りの一種として行われていた。
- 2) 唐代には角抵を専門とする角抵チーム、いわゆるプロが出現した。
- 3) 軍隊では角抵をもって兵士を訓練していた。
- 4) 民間では角抵は広く普及していた。

以上で取り上げたように、隋・唐の時代には武術は重用され、官吏の教養としても実施されるまでになっていたといえる。しかし、それは戦争に備えるための官吏の心構えでもあったといえよう。

3. 少林寺の自衛手段としての僧の武装化

1) 自衛手段としての僧の武装化

少林拳とはいうまでもなく少林寺に居を構えた僧の間で造り上げられた拳法であるが、これはまず「山林の中の鳥や動物の格闘や動作を観察しながら『心意拳』のための簡単な套路(日本でいうと型のこと、引用者注)の動作」を創り上げ、次いで「東漢末の時に華佗が創った『五禽戲』に変化を加えた」上で、さらに「総合的で変化に富んだ拳術」として体系化されたものと理解することができる⁶⁰⁾。このようにして創案された拳術の種類は100以上にのぼるが、これを総称して「少林拳」と呼ぶ。

古代において少林寺に出家して僧となる者の中には、苦難な生活事情に迫られた者、封建社会の制度に不満を感じた者、俗世間に嫌気がさした者、あるいは武術をさらに高めようとした者がいたと言われるが、武術の修練を目的にした僧にとっては「少林寺は常に切磋琢磨して武芸を磨く場所であった」ということができよう⁶¹⁾。

ところで、唐の時代は仏教が隆盛した時代でもあったが、少林寺も時の政権の庇護を受けて大きな勢力を持つようになったといわれている。一方、この時代は「武挙制」が施行され、民間と政府の両方での演武活動が活発になった時代でもあった。したがって、仏教寺院としての少林寺を母体にして発展

をしていた武術は、少林武術として世にその名を馳せずにはおかなかったと言えよう。大詩人の李白は15歳の時に剣術を学んだが、彼が好んでよく用いた格言に「一剣一杯酒」とあることから推し量ることができるように、彼は剣と共に四方を漫遊したと伝えられている。このことから、唐代において武術が盛んであったと推すことができよう。これに続く宋朝の時代、武術の民間への浸透がみられ、中国武術の裾野は広がった。この時代に「街の中でよく様々な武芸を披露する芸人が見かけられた」のはそのためである⁶²⁾。

話題を少林寺に戻すと、北宋元年、少林寺の「福居和尚は全国十八家の武術の達人を少林寺に招」いたが、その後、「三年の時間をかけて、各流派の長所を取り入れ、少林拳譜をまとめた」上で、さらに福居は「僧侶たちにそれを練習させ、精通するように要求した」⁶³⁾という。これは、少林寺の中において、僧が武装して敵と戦う準備がいつでもできていなければならない、との考えが持たれ続けた結果であると解することもできよう。この伝統的な考えは少なくとも、「隋末及び唐の始め、少林寺の管長は寺院の安全を守るために、僧侶の中から体が強く勇敢で、拳術や兵器が上手な者たちを選び、寺の護衛隊を編成した」という史実から推量することができる⁶⁴⁾。

このように少林寺における僧侶の武装化は隋末・唐代に顕在化した。始めは寺院を自衛するための手段であったが、やがて僧侶による武装集団となって寺の外に出て、時の政権に取り入るための集団に変質していくようになった。次に取り上げる少林寺僧の武功はまさしくこのことを物語るものである。

2) 少林寺僧の武功

少林寺僧の武功は隋及び唐の時代に確認することができる。少林寺はこの時代に二度にわたって僧兵を戦場に送り、その戦功(武功)により皇帝から褒章が与えられているからである。隋の初代皇帝は少林寺に土地を100頃与え、唐の皇帝太宗は少林寺の僧、曇宗等に対して王世充の甥である王仁則を捕まえ功績により曇宗に將軍の位を与えるとともに少林寺の僧に褒美を与えているからである⁶⁵⁾。このような少林寺僧の武功は少林寺に建てられた碑文から知ることができるが、それを整理すると次のようにまとめられる⁶⁶⁾。

寺に現存するいくつかの碑文は少林武僧がか

つて二回にわたって軍事活動に参加したことを証明する。隋の末(およそ少林寺武僧らは盜賊の攻撃を防御し、さらに621年の春に彼らは後に唐の王となる李世民とともに隋朝を滅亡させたライバルの王世充との戦いに参加した。王世充との戦いは王世充が都と定めた洛陽の近郊で起こった。王世充が敗れてから、唐王は少林武僧たちを手厚く厚遇した。その中の一人に唐王は李世民の軍隊の大將軍に任命した。碑文の中にはまた李世民が少林武僧たちに宛てた感謝の手紙や政府の文書が記されている。その中には、少林武僧たちが軍に協力をしたことに対して、唐朝政府は寺院に土地や他の特殊な権利を与えることになったことを示している。

少林武僧の一部分が少なくとも二回、戦闘に参加したという事実は、このように、唐代の石碑にはっきりと刻まれているので疑問はないのだが、それらの碑文が触れていない部分も同様に重要である。それは武術訓練と少林武僧たちの技の凄さである。仮定を立てるとなると、一つの可能性は、彼らが寺院の中で武術の訓練を受けることで、抜群の技を磨いていたことに求められ、もう一つの可能性としては、寺の外で武術の訓練を受けていたということに求められる。あるいは彼らは戦争に参加するために(寺院内での通常の生活の一部としてではなく)特別に武術の訓練をしたということもあり得る。さらに考えられるのは、唐代の少林僧たちはもともと武術の訓練を受けたことがないにもかかわらず、それでも戦闘に加わったことだ。

少林の碑文に刻まれた事柄は唐代の少林寺が戦争に関与したということの唯一の証拠である。少林寺を訪ねたことのある唐代の著名な文人たちの旅行記や詩歌には寺で武術の訓練が行われていたことについては述べられていないからである。また、その後の宋や元の時代の文献にも少林武術に関して記されているものはない。そのため、武術が唐代の時に既に寺院で健康を保つ運動法の一部としてあったことは真実かもしれないが、現存する資料ではその結論を裏づけることもできない。

このように少林寺に建立された碑文からしか武僧の活躍の様子を垣間見ることができないのであるが、唐の時代における少林寺の僧兵に関しては『方輿紀要』によっても確かめることができる⁶⁷⁾。

一方、この『少林寺碑』には李世民が少林寺に下賜した『御書』の内容についても触れているが、これを通して少林寺の武僧の武功を知ることでもできる⁶⁸⁾。少林寺の僧が武功をあげ、これが時の王によって報奨されたことが記されているからである。少林寺の武僧の戦いぶりに関しては隋末・唐代のものが多いが、その中でも唐代において少林寺僧が鍛練した武術に関しては、席書錦の『嵩岳由游記』⁶⁹⁾、褚人獲の『堅瓠集』⁷⁰⁾、特摩の『良夜』⁷¹⁾及び王西乾の『中岳』⁷²⁾などの史料から知ることができよう。

3) 中国武術の中核としての少林拳の誕生

少林拳は俗称として外家拳とも呼ばれ、人と人とが格闘するのが主である。この拳法は、今日中国武術の中核となっているのであるが、その誕生については複数の説が出されている⁷³⁾。その一つは達磨の「羅漢十八手」を原型であるとするものである。達磨がこの十八手を格闘の目的で作ったのではなく、いくなれば健康の目的を実現する手段として考案したのであるが、その姿勢や動作は拳術から借用したものであったという。第二の説は『北拳匯編』⁷⁴⁾に唯一確認できるものである。それによると、「少林派は外家とも呼ばれ、宋の太祖趙匡胤が初祖である。匡胤は奇技を持ち、人には見せない。酒に酔った後、大臣たちに奥義を語ろうとしたが、うまくいかなかったことを後悔し、仕方なく、それを文書で認め、それを少林寺に収めた。そこには、その技は直線的な動きが主体になっていることが示されている。」という内容が記されている。第三の説は『唐書』⁷⁵⁾を拠り所とした説である。これによると、少林寺の僧侶曇宗など十三人の僧侶が唐の太宗を助けて王世充を討った、という史実に基づき、少林寺の僧侶たちによる武術の練習は北魏以降に始まっていたと推量することができる。そして最後の第四の説であるが、これは今日、有力視されている説である。『記効新書』⁷⁶⁾には、「宋太祖には三十二式長拳があり、また六歩拳、猿拳、四拳という名勢がある」と記されていることから、洪拳は宋太祖が創ったとみなすことができるとして、少林拳が太祖から影響を受けた可能性がある」と指摘するものである。

このような複数の「少林拳」誕生を巡る説の中でも、これまでに最も多く唱えられてきた説は達磨大師による創案の説である。これは中国における大乘仏教としての禅の始祖とされる達磨を登場させるこ

とによって、少林拳を権威づけるためのものであると思われる。このことは中国武術の中で、少林拳が中核的地位にあることを同時に物語るものである。そこで、ここではいくつかの少林拳の誕生の説をあえて取り上げて分析したい。達磨は魏に移り、嵩山少林寺に留錫⁷⁷⁾し、面壁九年の禅行に励んだ。これによって彼は中国禅宗の初祖と呼ばれるようになった。彼が創った羅漢十八手は後世の少林拳の源となった。達磨は少林寺で説法した時、僧侶たちの精神と筋力が萎え衰えているのを見て、精神を鍛えるため、生理的に適切な体操術を創案した。達磨は肉体と精神の関係を次のように語った：「靈魂はその静を欲して悟り、軀殻(体)はその健を欲して通ずる。静に非ざれば証悟によって成仏することができず、健に非ざれば血気を走行させることができない。ゆえに身体は適切に勤勞させて、筋肉を伸ばし精神をゆるやかにすべきである。そうすれば、靈魂には拘束と衰弱の苦しみがなくなる。」と⁷⁸⁾。

また、このような菩提達磨の「少林拳」の創案説もある。すなわち、菩提達磨は面壁しながら静座し、修行をしたのであるが、仏法を邪念のない心で以って修めるために終日静座しているので、体が疲労するのは免れないことだったこと、及び少林寺は山の奥に位置しているので冬は寒く夏は暑さが過酷であり、野獣の危険も多いことから、菩提達磨は武功が好きな弟子たちと一緒に中国の古代から伝えられてきた身体を鍛える動作を模倣しながら「活身法」という健康法を創り、僧侶達に伝えたというものである。この体操法は18の動作からなっていたことから「羅漢十八手」と呼ばれたが、さらにこれを基に剣、棍及び杖などの武器を使った防犯や護身の動作を研究し、「達磨杖」や「達磨剣」等の武術を創ったという⁷⁹⁾。なお、この菩提達磨の創案になる武術以外にも、達磨の創案であるとする武術が示されてきた。すなわち『易筋経』と『洗髓経』である。しかし、これらを達磨大師の創案とする見解⁸⁰⁾は後代になって少林拳を権威づけるためのものであって根拠のないものであるといわねばならない。

ところで、少林拳を誕生させた背景には、少林寺という寺院の境内においてこの寺院の僧であるならいつでも武装して敵と戦う準備ができていなければならない、との考えが当の僧たちに持たれ続けたという事情があったと解するのは自然であろう。

このような考えは、少なくとも、「隋末及び唐の始めに、少林寺の管長が寺院の安全を守るために、僧侶の中から体が強く勇敢で、拳術や兵器が上手な者たちを選び、寺の護衛隊を編成した」⁸¹⁾ という史実から推量することができる。このように少林寺における僧侶の武装化は自衛手段であったが、やがて僧侶による武装集団が寺の外に出て、時の政権に取り入り、宗派を守るための手段へと変質していくようになった。

この寺院は寺院の防衛のために僧侶が武装したことで、少林寺独自の武術が誕生し、この少林寺の武僧たちが戦場に赴き武功をあげたことで、少林寺の武術は有名になり、いつしかこの武術の名称に少林寺の名が冠された拳法（＝「少林拳」）が中国の武術を総称する名称としてその地位を得るに至ったといえよう。

IV. 結 び

これまでの論述に若干の所見を交えて整理すると以下のようにまとめることができよう。

- 1) 少林寺という寺院で育まれた武術（＝少林拳）についてその史的背景を検討した結果、その背景の一つにあげられるのは中国における仏教の伝来と普及であることが明らかとなった。中国に移入された仏教は道教や儒教などの中国伝来の思想と融合しながらその教線を延ばしていったが、国家権力の弾圧を経験した。しかし、この一方で、隋や唐などの皇帝によって庇護されるようになり、よりいっそうの普及・発展が約束されることとなった。
- 2) 495年にインドの僧である仏陀禪師（跋陀とも呼ばれた）が嵩山の少室山に道場を構えて少林寺の開基となったが、この寺院も同じく国家権力の弾圧と庇護を経験することになった。跋陀はこの寺院で小乗禅の修行につとめている。その後、この寺院にインドから菩提達磨がやってきて大乘禅を伝えた。
- 3) 菩提達磨は9年間の壁面修行をしたことで知られる。その修行は身体を健康を損なう激しいものであったことから、彼が修行僧のために健康体操として「羅漢十八手」を創案したと伝えられた。しかし、この体操は彼の創案であるか否かは明白ではない。むしろ菩提達磨の創案

であるということによって、少林寺の武術の権威化を図り、少林拳の創案者にしたいとの後代の意図が強く働いているとみるべきものであった。

- 4) 少林寺は賊の襲撃に度々さらされたために、自衛の手段として修行僧たちは武術に励まねばならなかった。やがて、少林寺には武装集団が編成されることになり、時の国家の要請に応じてこの寺院から出陣するようになった。この傾向は隋末・唐代より確かめることができる。
- 5) その結果、武僧の活躍は目覚ましく、時の政府から厚くもてなされるようになった。そのことによって、少林寺は禅宗の寺院としてよりもむしろ武術家の養成施設として有名になり、中国武術の聖地となったのである。ここに「少林拳」の誕生をみることができるといえよう。

注記及び引用参考文献

- 1) 中国河南省登封市にある嵩山の山麓にある中国禅宗の寺院。
- 2) 張 国臣：『中国少林文化学』中国河南省，河南人民出版社，1999，p. 17.
- 3) 登封県誌事務室：『新編少林寺誌』中国北京，中国旅行出版社，1988，p. 51.
- 4) 少林寺与少林拳編写組：『少林寺与少林拳』中国広州，広州科技出版社，1984，pp. 31-32.
- 5) 習 雲太：『中国武術史』中国北京，人民体育出版社，1985.
- 6) 体育史教材編写組：『高等学校教材一『体育史』中国北京，高等教育出版社，1996.
- 7) 李 季芳ほか：『中国古代体育史簡編』中国北京，人民体育出版社，1984.
- 8) 松田隆智：『復刻版 図説中国武術史』埼玉，壮神社，2001.
- 9) 笠尾恭二：『中国武術史大観』東京，福昌堂，1994.
- 10) 蔡 龍雲：『少林寺拳棒闡宗』中国浙江，浙江科学技术出版社，1983.
- 11) 汴京論苑編集：『浅論少林武術对中華文化的影響，「汴京論苑」中国河南，1991，pp. 53-59.
- 12) 少室山人：『少林武術百科全书』中国北京，京華出版社，1995.
- 13) 夏 維明：『明代少林武術考』、『少林功夫文集』中国河南省，嵩山少林寺，2003，pp. 16-48.
- 14) 周 偉良：『明清時期少林武術的歷史流变』、『少林功夫文集』中国河南省，嵩山少林寺，2003，pp. 5-15.

- 15) 松田隆智:『中国武術—少林拳と太極拳』東京, 新人物往来社, 1972.
- 16) 体育史教材編写組: 高等学校教材—『体育史』中国北京, 高等教育出版社, 1996.
- 17) 李 季芳ほか:『中国古代体育史簡編』中国北京, 人民体育出版社, 1984.
- 18) 松田隆智:『図説中国武術史』埼玉, 壮神社, 2001.
- 19) 笠尾恭二:『中国武術史大観』東京, 福昌堂, 1994.
- 20) 鎌田茂雄:『中国仏教史』岩波全書, 1978, pp. 6-7.
- 21) 鎌田茂雄:『中国仏教史』岩波全書, 1978, pp. 2-3.
- 22) 鎌田茂雄:『中国仏教史』岩波全書, 1978, p. 3.
- 23) 「黄」は、黄帝のことを指す。「老」は、言うまでもなく老子のことである。道教の無為自然思想の影響, 人間の知恵は大自然の偉大な力の前にはごく小さな存在で, 人は自然の法則に逆らわず自然に従って生きるべきだ, と説くのが黄老の教えである.
- 24) 鎌田茂雄:『中国仏教史』岩波全書, 1978, p. 20.
- 25) 浮屠は, ①仏塔 ②仏陀 ③旧時に僧, 仏教を指した.
- 26) 鎌田茂雄:『中国仏教史』岩波全書, 1978, p. 21.
- 27) 鎌田茂雄:『中国仏教史』岩波全書, 1978, pp. 22-23.
- 28) 鎌田茂雄:『中国仏教史』岩波全書, 1978, p. 23.
- 29) 鎌田茂雄:『中国仏教史』岩波全書, 1978, p. 24.
- 30) 鎌田茂雄:『中国仏教史』岩波全書, 1978, p. 113.
- 31) 「五常」とは, 儒家のもので, 仁, 義, 礼, 智, 信を指し, 「五戒」とは, 仏教のもので, 不殺生, 不盗, 不淫, 不妄, 不飲酒をさす. 相互調和することを指す.
- 32) 鎌田茂雄:『中国仏教史』岩波全書, 1978, p. 114.
- 33) 鎌田茂雄: 中国仏教, 『仏教大事典』(古田・金岡他編) 所収, 小学館, 1988, p. 672.
- 34) 古田紹欽: 禅, 『仏教大事典』(古田・金岡他編) 所収, 小学館, 1988, p. 563.
- 35) 王 西乾: 嵩山文物名勝專輯『中岳』, 「少林寺与少林武術」, 1984, pp. 64-66.
これを史実として証すのは『魏書』であるが, そこでは次のように記されている:「また有り, 西域の沙間, 名は跋陀. 道業有り, 深く高祖の敬い信ずるところとなる. 詔して少室山陰に少林寺を立て, これに居らしめ, 衣・物を公給す. 北周時代, 少林寺は陟岵寺と名を改めて, 隋の初期, 少林寺は旧名に復した.」
- 36) 張 国臣:『中国少林文化学』中国河南省, 河南人民出版社, 1999, pp. 51-55.
- 37) 張 国臣:『中国少林文化学』中国河南省, 河南人民出版社, 1999, pp. 53-59.
- 38) 少室山人:『少林寺武術百科全書』中国北京, 京華出版社, 1995, pp. 1-5.
- 39) 藤井教公: 菩提達磨, 『仏教大辞典』小学館, 1998, p. 909.
- 40) 王 西乾: 嵩山文物名勝專輯『中岳』, 「少林寺与少林武術」, 1984, p. 65.
- 41) 笹島恒輔:『中国体育史』逍遙書院, 1960, p. 18.
- 42) 笹島恒輔:『中国体育史』逍遙書院, 1960, p. 19.
- 43) 張 国臣:『中国少林文化学』中国河南省, 河南人民出版社, 1999, p. 404.
- 44) 鎌田茂雄:『中国仏教史』岩波全書, 1978, pp. 107-108.
なお, 北魏時代には「仏経は流通し, 415 部, 1919 卷が魏に集まり, 僧尼数二百万, 寺院三万数える」までになったという.
- 45) 1. 王 長青:『少林武術精華』中国北京, 中国人民体育出版社, 2001, pp. 11-12.
2. 无 谷・劉 志学編:『少林寺資料集』中国北京, 書目文献出版社, 1982, pp. 3-6.
- 46) 少室山人:『少林寺武術百科全書』中国北京, 京華出版社, 1995, pp. 2-5.
- 47) 少室山人:『少林寺武術百科全書』中国北京, 京華出版社, 1995, pp. 2-10.
- 48) 鎌田茂雄:『中国仏教史』岩波全書, 1978, p. 172.
- 49) 鎌田茂雄:『中国仏教史』岩波全書, 1978, p. 172.
- 50) 岸本美緒・浜口充子:『東アジアの中の中国史』日本放送協会, 2003, pp. 49-51.
- 51) 裴 濯:『少林寺碑』中国河南省, 少林寺存, (唐代), 728.
- 52) 鎌田茂雄:『中国仏教史』岩波全書, 1978, pp. 205-206.
- 53) 鎌田茂雄:『中国仏教史』岩波全書, 1978, p. 210.
- 54) 張 国臣:『中国少林文化学』中国河南省, 河南人民出版社, 1999, pp. 403-405.
- 55) 中国体育史学会:『中国古代体育史』北京体育学院出版, 1990, pp. 280-286.
- 56) 中国体育史学会:『中国古代体育史』北京体育学院出版, 1990, pp. 287.
- 57) 中国体育史学会:『中国古代体育史』北京体育

- 学院出版, 1990, pp. 299-302.
- 58) 中国体育史学会:『中国古代体育史』北京体育学院出版, 1990, pp. 282-284.
- 59) 中国体育史学会:『中国古代体育史』北京体育学院出版, 1990, pp. 300-302.
- 60) 張 国臣:『中国少林文化学』中国河南省, 河南人民出版社, 1999, pp. 45-90.
- 61) 張 国臣:『中国少林文化学』中国河南省, 河南人民出版社, 1999, pp. 51-58.
- 62) 張 国臣:『中国少林文化学』中国河南省, 河南人民出版社, 1999, pp. 402-405.
- 63) 張 国臣:『中国少林文化学』中国河南省, 河南人民出版社, 1999, pp. 51-90.
- 64) 張 国臣:『中国少林文化学』中国河南省, 河南人民出版社, 1999, p. 50.
- 65) 裴 濯:『少林寺碑』中国河南省, 少林寺存, (唐代), 728.
- 66) 嵩山少林寺:『少林功夫文集』中国河南省, 嵩山少林寺, 2003.
- 67) 洪 亮吉:『登封県誌』「唐代における少林僧兵」, (清朝), 1786.
- 68) 裴 濯:『少林寺碑』中国河南省, 少林寺存, (唐代), 728.
- 69) 席 書錦:僧兵,『嵩岳由游記』所収, p. 42.
- 70) 褚人獲:少林寺僧,『堅瓠集』所収, p. 50.
- 71) 特 摩:少林寺を三度たずねる,『良夜』142期, 所収, p. 50.
- 72) 王 西乾:嵩山文物名勝專輯『中岳』,「少林寺与少林武術」所収, p. 65.
- 73) 少室山人:『少林寺武術百科全書』中国北京, 京華出版社, 1995, pp. 2-5.
- 74) 不明:『北拳匯編』,『少林寺資料集』, 所収, p. 55.
- 75) 欧 陽脩, 宋 祁編:『唐書』南宋時代,『中国百科全書』所収, p. 1062.
- 76) 戚 繼光:『記効新書』明代万曆年間,『中国武術史』所収, p. 60.
- 77) 留錫は僧堂に残留すること.
- 78) 郭 希汾:『中国体育史』, 中国上海, 商務印書館, 1919.
- 79) 張 国臣:『中国少林文化学』中国河南省, 河南人民出版社, 1999, pp. 402-405.
- 80) 尊我齋主人:『少林拳術秘訣』, 中国上海, 中華書局, 1915.
- 81) 張 国臣:『中国少林文化学』中国河南省, 河南人民出版社, 1999, p. 50.